

浅虫ダムに照明灯を設置しました！

浅虫ダムは、森・川・海に囲まれる恵まれた自然環境の中にあり、温泉街にも近いことから、朝夕の散歩、ほたる鑑賞、植物観察等で訪れる方が多く、年間を通して人気のスポットとなっています。

しかし、ダム湖周辺には照明設備が少なく、夜間は暗所となることから、地元より照明灯を設置してほしいとの声があり、改善が必要となっていたところです。

照明灯の設置にあたっては、電力柱の設置等で景観を損ねないこと、ほたるのシーズン中は消灯できるタイプを選定し、今年度はLED照明灯（太陽電池式）を8基設置しました。

この照明灯は来年度も増設する予定であり、来訪者の安全確保、防犯対策の向上などが期待されることです。

設置前（平成27年7月）



設置後（平成27年12月）



（ダムサイト右岸駐車場付近）



（第二貯砂ダム付近）

現場代理人の声 ～4号工事用道路 崩壊斜面对策工事を振り返って～

4号工事用道路の崩壊斜面对策工事を無事完成させた現場代理人の方々（掘削工事：(株)佐藤建業 柏谷哲也さん、法面保護工事：田中建設(株) 小笠原和臣さん）に現場で苦労した点、安全管理で気をつけた点等について聞きました。

掘削工事：(株)佐藤建業 柏谷哲也さん

○現場で苦労した点

急傾斜地で片押し施工と逆巻工法にて施工する困難な現場条件において、高低差50m近くある斜面への重機搬入、切土掘削及び残土搬出に苦労しました。また、工期が切迫するなかで、法面保護工事業者への引渡をいそぐ必要があったため、作業工程の調整に苦慮しました。

○安全管理で気をつけた点

墜落・転落等様々な危険リスクはありますが、特に危険リスクが大きい斜面崩壊においては、監督員・現場技術員と密に協議を重ね、現場計測及び監視員配置等の対策を講じ、切土法面や周辺斜面の点検を実施することで安全を確保しました。

○現場を終えての感想

無事に完工できたのは発注者と施工者のコミュニケーションが良くとれたのが最大の要因だと考えます。ご指導いただいた関係者の方々、本当にありがとうございました。そしてお世話になりました。お陰様で、私の経験値がかなりUPしました。正直この重責から開放されホッとしています(笑)



法面保護工事：田中建設(株) 小笠原和臣さん

○現場で苦労した点

八甲田連峰での法面工事は、気象変化が激しく、里では晴天でも現場は風雨で、作業環境が非常に厳しい日が多々ありました。それでも、スタッフ一丸となって早期完成に努めました。

○安全管理で気をつけた点

高所での作業なので、転落、落下災害に十分注意し、日々の朝礼、指差呼称にて、親綱確認を励行しました。

○現場を終えての感想

工期に追われる日々でしたが、積雪前に完成できて、ホッとしています。



雑感～土木の語源 築土構木～

前漢の初め頃（紀元前150年頃）の、淮南（わいなん）王・劉安による書物「淮南子（えなんじ）」にある一節が「土木」という言葉の語源だそうです。

『古者民澤處復穴、冬日則不勝霜雪霧露、夏日則不勝暑熱蚊虻、聖人乃作、為之**築土構木**、以為室屋、上棟下宇、以蔽風雨、以避寒暑、而百姓安之』

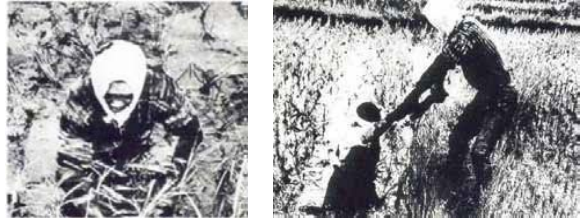
〔古者（イニシエ）は民、澤處（タクショク）し、復穴（フッケツ）し、冬日（トウジツ）は、則（スナフ）ち霜雪霧露（ソウセツムロ）に勝（カチ）えず、夏日（カジツ）は、則（スナフ）ち暑熱蚊虻（ショネツブンボウ）に勝（カチ）えず、聖人（セイジン）乃（スナフ）ち作（オコ）り、之（コレ）が為（タメ）に**土（ツチ）を築（キズ）き木（キ）を構（カマ）えて**、以（モ）って室屋（シツオク）と為（ナ）し、棟（トウ）を上（ウエ）にし、宇（ウ）を下（シタ）にし、以（モ）って風雨（フウウ）を蔽（オオ）い、以（モ）って寒暑（カンショ）を避（サ）けしめ、而（シコウ）して百姓（ヒャクセイ）之（コレ）を安（ヤス）んず〕

〈昔の人は沢や穴の中に住んでいたの、冬には霜、雪、霧、夜露を避けることができず、夏には暑さと蚊や虻（ブヨ）を避けることができなかった。そこへ聖人が現れて、土を築いて盛上げ、木を使って構えてこれで家屋とし、棟木を上（ウエ）に構え、その下に部屋を作って家屋とした。これで風雨を遮り寒暑を避け、人々は安んじて生活ができるようになった〉

以上が当該部分の意味だそうです。これからすると、元々は住居、つまり建築について書かれたものなのではないでしょうか。勝手に推測すると、最初は人間の住処が最優先課題として、築土構木を行っていたが、その後人口が増えるに従い、食料確保のために、耕地・用水の確保・整備、さらには防災・交通基盤の整備、それらのための築土構木へと発展していったのでしょうか。現在では土木（Civil Engineering）と建築（Architecture、Building）は、明確に区分されていますが、築土構木という言葉に、人類が発展するために、原始的なものから現在のハイテクに至るまで、営々と受け継ぎ進化させてきた技術というものが感じられるような気がします。（余談ですが、

シビルエンジニアリングとは『軍事工学・ミリタリーエンジニアリング』に対する市民工学という意味だそうです。また、土木の2文字を分解すると十一と十八になるので、11月18日を『土木の日』としたそうです）

さて、国土交通省HPの河川整備基本方針の岩木川水系のページで「岩木川水系流域及び河川の概要」という資料中「流域の自然状況」の6ページ目に「腰切田」「乳切田」（出典：つがる市（旧車力村）教育委員会）と見出しのついた写真が掲載されていて、「極度の排水不良地のため本格的な灌漑事業が行われる以前の水田は、腰まで沈むほどの低湿地で「腰切田」「乳切田」と呼ばれていた。」との説明があります。



我がふるさと旧車力村の写真なので、場所は十三湖に流入する山田川下流かもしれませんが、兎に角、昭和30年代頃までは、このように壮絶な農作業だったのでしょうか。この60年程前と現在を比較して考えるにつれ、国土の1割に過ぎない洪水氾濫区域・低平地に生産・居住の場を求め生活している我々日本人にとって、安定した安全な暮らしを営むための、土と水との闘い、そして克服は必要不可欠なことであったわけで、先人達の凄まじいこの努力が現在の我々の豊かな生活をもたらしてくれているのだと思います。そしてこの土・水との闘いは、まさに「土木」そのものではないでしょうか。昔、土木の先生が、「構造の先生には悪いが、水を取り扱う範囲、その重要性を考えれば、本当は『土木』ではなく、『土水』と言うべきだ」と仰っていたのを思い出しました。「ドスイ」はさすがに少し違和感がありますが、このように本来、「土木」とは、木（構造）、土（岩盤も含めて）、そして水（地下、河川、海）、これを対象としているのです。

当月号のダム新聞100号は、創刊を発案した当時の第23代所長（平成19年～21年度）の千葉千秋氏に寄稿をお願いしました。創刊に当たっての当時の思い、状況等について執筆して下さいました。じっくりとお読み下さい。

ダム新聞創刊 100 号の節目に寄せて

t o w a r d s t h e f u t u r e

寄稿者 千葉 千秋

元駒込ダム建設事務所所長

1. はじめに

この度、『ダム新聞（駒込ダム建設所発行）』が 100 号を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。代々の発行者サイドの工夫やご努力もさることながら、これに寄り添ってこられたサイドの皆様、すなわち読んでくださる方々にも感謝申し上げます。次第です。

さらには、今回記念すべき 100 号を発行にあたり、発意者というキーワードで抽出し拙文を掲載する機会を与えて下さいました関係者の皆様に重ねて感謝を申し上げます。

2. つぎに

創刊当時（平成 19 年）、ダム建設事業を取り巻く環境は、多岐にわたり厳しさと閉塞感が増幅し続けていたときでした。このフレーズにあって個人的（堤川被災者・現在も流域住民です。）にも『治水上、駒込ダムは流域住民にとって欠かせざるものである。』と考えていたことから、証明済みの命題であるも、この命題をわかりやすく簡単に証明できないかを愚者なりに模索していました。結果的に、私は、この対偶（背理法）を証明するだけの多面的な能力・実行力等を持ちあわせていなかったのも、今後とも知的腕力のある関係者の皆さんに更なるご尽力をお願いしたいと思います。

ものごとは表裏一体で進むのに、案外に裏のことは表面にはあがってきません。例えば、昨今 TV 報道された尾形光琳作『風神と雷神図屏風』（金地にでんでん太鼓と風の袋をそれぞれに背負い向かい合っている一対の鬼の図）の裏側がどうなっているかをあまり知られていないように。

そこで当時を回顧し裏側の事象数点にスポットをあててご紹介させていただきます。

3. ダム新聞発行を思い立った表裏話

-1 といいつつも、まずは表の話から

・ダム新聞第 1 号（平成 19 年 6 月）を見ると【4.発刊者のひとりごと「小規模公所・単独公所」だからこそ発信できるもの・試行できるものはないかと日々模索しています。さらには「出来ない理由を探す」のではなく、「できる理由を探す」ための努力をして参りますのでよろしくご指導のほど。あわせて情報提供等もよろしくお願いいたします。】と掲載していたところです。（原文のまま）

- ① ダム事業情報に関する発信能力の向上
- ② 職員の意識改革を目指す
- ③ 自己啓発・研鑽をする。

表向きには以上の目標を目指していました。いま改めて読み返すと赤面の至りです。

-2 つぎに裏の話

・当時（平成 19 年度）ダム建設所内の一部職員にあっては小規模事務所特有のいわゆる閉塞病、情報の渴望病及び食わず嫌い病・初食い病（初のダム担当等に起因する種々のジレンマの意）に罹患していました。問題解決にあたり、ここでやっている仕事が興味深く自分の成長につながるという人材マネジメントの実践を目指しました。→まずはダムを好きになってもらいたい→つぎに深く理解してもらおう→もってダム技術者たれと。このような単純戦略風のもと、定期的に話題提供を行い、情報交換・学習の場にしたいとダム新聞発行のアイデアを思いつきました。

-3 ネタはどこから集めたか

・多くは職員との日常会話から発生した情報・疑問点からヒント等を得ました。次に多かったのは業務上のトピックス行事の紹介（作業行事、見

学者紹介等)、ダム建設・管理状況の紹介等や各種参考書の一部抜粋及び要約(各種ビジネス本、専門書、初心者向けの技術書、職員受講研修会テキスト・四文字熟語辞典等)、現地取材等が主でした。読まれやすいようにと俳句(第4号)雑学(第5号さんまの語源等)等を載せました。ついつい慣れ・多忙などのご都合主義な理由をあげ、4月号はこれ5月号あれと、記事内容がマンネリになりがちでした。特に職員改革に関するものは、悩み過ぎて思う通りに進みませんでした。劇的に紙面が賑やかになったのは、とある場所で「個人が変わる。集団が変わる。組織が変わる。」という一文を読み、集団が変わるということは、個人・自分自身が変わらないことにはどうにもならないことを再認識したことです。変化は6号(PDCAを紹介)あたりからでしょう。

再認識したものの、さてどう取り組むか、自学自習・研鑽のためにどうアプローチするかを悩んでいるときに一枚の案内パンフレットと奇跡的な出会をしました。『サテライト講演会 【企業経営者や文化人、大学教授などの貴重なお話を聴く絶好の機会です。】慶応大学キャンパスでの講演を青森会場に配信し画面・音声付きでリアルタイム形態にて受講可能としたものです。』※(株)日本原燃テクノロジーセンター主催、受講料有料、多い年は14回程度開催。講師陣は学識経験者、著名人多数。この研修会には初回開催時から数年間受講し、記事ネタ拾いはもとより自己成長にも大いに役立った感があります。

-4 ダム新聞名を『barrage journal』と名付けた経緯は

・名称は一般的な方が、対外的にも他者からより好印象を獲得していたでしょう。大々的にダム新聞と銘打ってインパクトを高めることでの波及効果と逆の場合との軽重を考慮したのは事実です。

一方、ソフト感を与える名前はないものか、これからダム知識を知りたいサイドからのユニークな名称・発想を求めています。そこで長期臨時事務手(女史)の保有能力を活用し、フランス語辞典を開いてもらうとともに私自身の想いである「鶏口となるも牛後となるなかれ風」精神とをマッチさせ、『ダム+新聞』の単語をフランス語表示してみました。

4. 最後に

当時、ダム新聞編集に携わっているなか、さら

なる発展を目指すためには、決意を新たにする時期にきていると実感していました。記事マンネリ化からの脱却は直面する業務を選択処理している限り望めない。ダムの必要性を紹介した資料も作成したもののダム事業が進まないと明るい未来も見えてこないようです。この意味から本題から離れますが少しダム事業進捗に向け後押しをします。私ども団塊世代の元技術系公務員は尊敬する上司、諸先輩方の皆様から、『常に、政策づくりにあっても現場づくりにあっても、ひたすらよりよいものづくりを目指せ。』と土木技術者精神のありようを承継しました。昨今、残念ながらこの伝統的な気質は住民ニーズ等の変貌からして変質・変容せざるをえないものと実感しています。さらには職員数減少・業務の多様化等と相俟って『費用対効果』『効率化』及び『評価等』という、いわゆる自己成長・組織成長のために数多くの踏み絵を踏み続けてきました。プラス面もあればマイナス面もあります。結果として常に日々生起する当面の対応だけを最優先しようとする、という判断・行動につながり、周囲へも色濃く意識付けしていたようです。このことが結果的に『現場棄民化(ものづくり現場からの離脱の意)』となり、次世代の皆さんにある種の負の遺産をおいてきたかもしれないと危惧しているところです。解消するためには、一人ひとりが「公」を担う自覚を再認識し、実現に向け現場力を再構築することが肝要かもしれません。現場力とは問題解決能力であるとすれば、まさしく土木の施工現場は宝庫です。特に今世紀県内最後の大型プロジェクトになるであろう駒込ダム本体工事が早々に着手され、学びの場となり現場力向上の大舞台にならないと未来は明るくない。その際はダム新聞に大々的にダムルネサンス、現場カルネサンス等々のタイトルで掲載されんことを期待しています。

終わりに、駒込ダム事業完成に向けてふさわしい応援曲があるとすれば今年生誕150年を迎えた《シベリウス作曲 《交響曲第2番二長調 作品43》ではないでしょうか。現在の建設進捗状況は「第2楽章 歩くような速さで、しかし 自由に加減して」でしょう。曲調の様に近々に「第3楽章 ごく速く」段階に、そして「第4楽章 終曲。ほどよく快活に」へと進まれ、目的がほどよく快活に達成されることを祈っております。

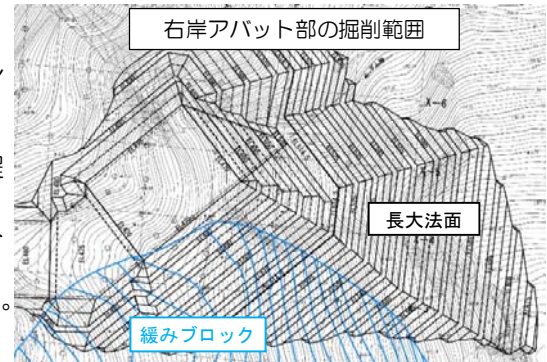
駒込ダム右岸造成アバットメント※工法とは？

※アバットメント：ダムが取り付けられる谷の斜面部分

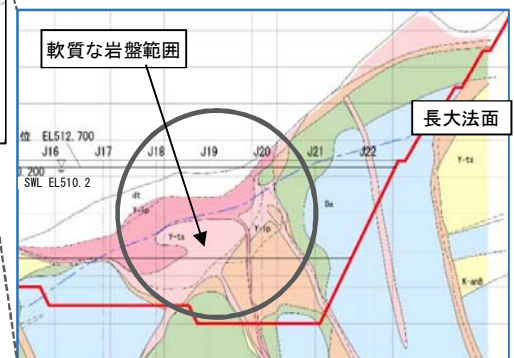
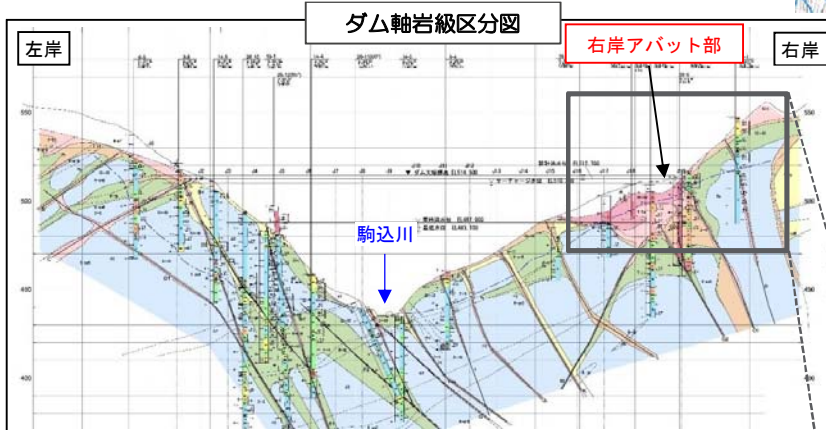
右岸アバット部の課題

駒込ダムの右岸アバット部では、変質を受けた軟質な岩盤が分布しているうえ、

- ①斜面勾配が約45°と急勾配であるため、ダムの基礎を堅岩に上座させると基礎掘削が大きくなり、平均勾配1:0.7で掘削しても60m程度の長大法面が発生する。
- ②ダムサイト右岸直上流に分布する崖錐及び変質を受けた岩盤（緩みブロック）に掘削が波及するため、膨大な法面対策工が必要となる。
- ③上記により多大な工事費を要するとともに全体工事の長期化を招く。などの課題が発生します。



駒込ダムは、十和田八幡平国立公園内に計画しているため、自然環境および景観への配慮が不可欠で、長大法面の発生を極力抑えることが重要となり、右岸アバット部の構造・形式の検討と併せて掘削法面を縮小することが大きな課題であると考えています。



右岸アバット部の課題への対応（造成アバットメント工法）

重力式コンクリートダムにおいてアバット部の基礎岩盤が悪い場合などには、弱層部の置換、掘削法面の縮小等を目的に造成アバットメント工法（大規模なコンクリート躯体による人工岩盤を設置する工法）を採用しているダムが全国的に増えてきています。

駒込ダムにおいても、前述した右岸アバット部の課題を解消するため、造成アバットメント工の採用に向けた検討を進めています。今回は、現時点までの検討内容について説明したいと思います。

造成アバットメント工概要

基礎部は堅岩に、斜面部は軟質な岩盤に着岩させます。

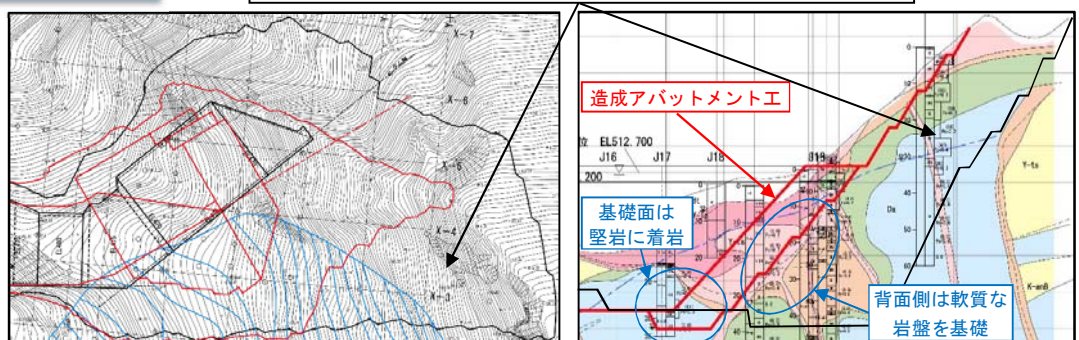
→造成アバットメント工は基礎面において安定性を満足するように設計するため、背面側は軟質な岩盤であっても問題ありません。また、掘削勾配を極力急勾配で設定出来るため、掘削範囲を縮減させることが可能となります。



造成アバットメント工による効果

造成アバットメント工により掘削する法面規模が縮小されるため、緑化等の法面对策規模も縮小され、環境負荷の低減および工事期間の短縮が図られます。

造成アバットメント工による法面縮減範囲（赤線と黒線間）
（赤線：造成アバットメント工採用、黒線：通常ダムの場合）



雑感～岩木山のゴリラ～

記憶では、平成27年の3月頃だと思うのですが、春の息吹が感じられる頃に、新聞（東奥日報）に、雪を被った岩木山の山肌が、ゴリラの顔のように見えるという記事が載っていました。そこで27年5月17日の日曜日に、実家の旧車力村からの帰り道、26年11月19日に開通した国道339号五所川原北バイパスから岩木山を携帯電話で撮影してみました。



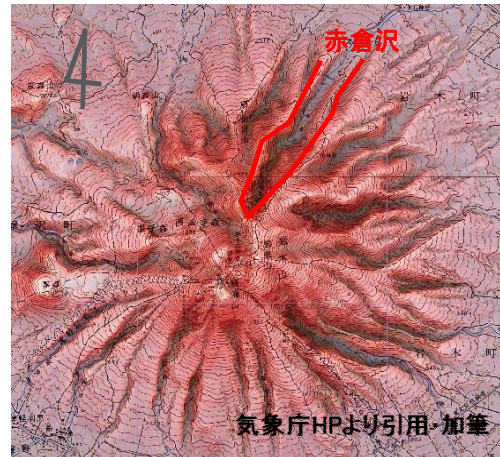
ガラケーにつき、画像は粗いのですが拡大してみると、



ゴリラの横顔（額が右側、顎が左側）を見ている感じです（見えないという方のために拙いイラストを描いてみました）。五所川原市や鶴田町等、北東方向から見るとこのように見えるようです。

このゴリラの額の部分から山の裾野に向かって、深く切り込まれた谷のような沢筋があります。この写真だとよくわからないのですが、これは赤倉沢といって岩木山のなかで最も深い渓谷と言われていて、東北大学の地震・噴火予知研究観測センターのHPでは

「山頂北東側の赤倉沢の馬蹄形火口は大規模な山体崩壊の跡で、北東山麓の岩屑なだれ堆積物には多数の流れ山地形がある。」と記載されており、また近年においても、「昭和53年5月6日赤倉沢で活発な噴気活動を発見」（気象庁HP）となっています。



そして、この岩木山は気象庁による常時観測47火山に選定され、平成23年度からは常時監視体制が確立されています。

意外に知られていないと思うのですが、この赤倉沢は、山腹を下り、津軽平野に至り、1級河川大石川となり、旧大峰川に注いでいます。つまり岩木川の二次支川なのです。岩木山は観光資源のみならず、この地域の文化・歴史の形成に多大な影響を与え、津軽の大地に大きな恵みをもたらしているわけですが、そこを詳細に（マニアックに）見ると、時にはゴリラの顔に見える地形が実は常時観測が必要

な「噴火の可能性が考えられる」（気象庁HP）箇所であり、そして、その場所から流下して、最終的に岩木川に注いでいるのです。その岩木川の上流では、27年10月10日（土）に流域市町村等による目屋ダム感謝の集いが開催され、そして今月2月からはいよいよ津軽ダムの試験湛水が始まります。そして、その後は、洪水防御、灌漑用水・水道用水等の安定的供給、さらには観光資源として、地元にも多大な貢献をしていくものと期待されています。

1年を振り返って 職員からの一言

古川総括主幹

5月に駒込ダム4号工事用道路の法面崩壊が発生し非常に心配しましたが、施工業者と担当者が連携し事故無く降雪前に法面对策を終えることができ、ほっとしています。また、浅虫ダムでは地元から要望のあった照明灯を駐車場に設置しましたが、ダム湖周辺の防犯に役立つことを期待しています。

伊東主幹

今年は春に発生した斜面崩壊工事の対策を優先させたため、3号橋の据付ができず4号工事用道路の全体工程が遅れる結果となり、とても残念です。やはり自然の力には勝てないことを実感させられました。

佐藤主査

今年は、下湯と浅虫のダム総合点検を実施し、長期的にダムの安全確保と機能保持を行うには、健全度評価と長寿命化計画に基づく適時の改修等が必要だと再認識いたしました。

今後は、経年劣化が著しい自身の体についても、堤体の歪み、水質悪化、機器異常等を徐々に解消し、計画的にリフレッシュしたいと思います。

山内技能技師

車点検・よ～し！
船点検・よ～し！

1年大きなトラブルなく無事すごせました。

新年度も安全運転でがんばります。

中村技師

2年間勤めたダム新聞編集長ですが、今月号をもちまして、異動に伴い任期終了となりました（まだ異動が発表になっていないので、来月号も担当していたりして・・・）。

ダム新聞愛読者の皆様、今後もダム新聞ご愛顧の程よろしくお願いします。

寺田主任専門員

再任用最初の職場、初めてのダム管理の仕事、十数年ぶりの設計積算等自分にできるか不安でしたが、教えて貰いながら何とか無事終えることができそうで「皆さんに感謝」しております。

監査廊の昇降設備「カラポネ号」が故障（制御盤取替が必要）で動かないため、階段の登り下りには心が折れました。

藤原現場技術員

工事を進めている4号工事用道路は、駒込川が形成される過程で浸食されてできた急斜面に計画している山岳道路です。この斜面には約40万年前以降の北八甲田火山活動により供給された新しい地層やこれを覆う堆積物が分布しているため施工途中で予期せぬ事態に直面したこともありましたが、工事の関係者全員が「限られた期間の中で良いものを作る」という目的を共有したことにより切り抜けることができたことは良い経験となりました。

小野寺ダム監視員

駒込ダム建設所3年目ダム監視員の小野寺と申します。今年度で卒業です。

下湯ダムと浅虫ダムについて
下湯ダムには、発電設備があります。常用洪水吐は凄い迫力です。
浅虫ダムは、温泉街の近くにあり、別名ホテル湖です。上流にぼたるがいます。自然に囲まれたダム湖です。

皆様、見学に来て下さい。ダムカ～ドありますよ

船水非常勤事務員

充実した一年間を送らせていただきました。色々心に残る事がありますが、小学生とダム見学をしたのがとても楽しかったです。私自身もとても勉強になりました。お世話になりっぱなしで、本当に感謝しています。

駒込ダム建設予定地～積雪状況～

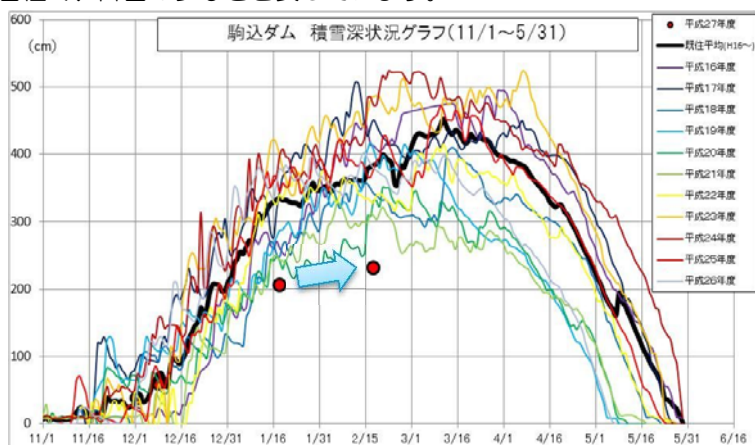
駒込ダム定点観測箇所における積雪状況を報告します（観測場所などの詳細については弊紙第55号参照）。
2/18の調査では、積雪深は231cmでした。

下図の積雪深状況グラフにて例年と比較してみますと、赤丸が今年度の積雪深、黒線が既往平均（H16～）の積雪深です。今年度の積雪深は観測期間で一番低く、降雪の少なさを表しています。

定点観測箇所～積雪状況



2/18 積雪深231cm



平成28年2月13日から津軽ダムでは試験湛水が始まりました。満水となる時期は大型連休あたりでしょうか。



写真は今年2月24日に撮影したもので、水位は約186.7mと思われます。津軽ダム上流側に見えているラインは目屋ダム天端で187.5mですから、後80cm位で水没するような状況です。

また、下の写真は27年6月3日に目屋ダム管理所の西村さんに案内して頂き、目屋ダム直下まで降りていったときのものです。



つまり、津軽ダムと目屋ダムの間ということであり、津軽ダムが水を貯め始めると水没してしまう場所で、なかなか見ることができないアングルです。この目屋ダム下流の写真には、渇水の際に、緊急放流に利用されるバンガーバルブが写っていますが、この高さは153m、その上のオリフィスの高さは170.5m、それに対して、津軽ダムの堤頂高は226.7m、そして最低水位は、170.0mで、その下は堆砂容量となっています。改めて津軽ダムの規模に圧倒されると共に、目屋ダムがそれに比べて小規模でありながら、これまで貢献してきたことの大きさを感じずにはいられません。

さて、昨年の12月には消費税を10%に引き上げる際の軽減税率の対象範囲について、
生鮮

食品までとか加工食品も含むとか、政府与党において侃々諤々の議論が行われていましたが、このような、毎日毎日365日の消費税に対して、100年に1度の洪水を対象とした河川・ダム事業、或いは数百年に1度の津波を対象とした津波対策等は、世間一般の積極的な思考の対象になりにくいのではないのでしょうか。今現在、身近に起こっていないことに対してその対策等を考えるには、理性ある健全な想像力が必要であると思いますが、昨年リアルタイムでテレビ中継された、鬼怒川の破堤により家屋が一瞬で流される等の光景を見るにつけ、百年に1度の洪水でマイホームが流されないような防災対策の重要性を痛感する次第です。

私どもの管理している下湯ダムと浅虫ダムは、現在厳寒期でダム湖は写真のように一部凍っています。



これからの雪解け時には上流山地に積もった雪が雨と一緒に洪水となってダム湖に流入してきますが、これを下流河川が氾濫しないように貯め込み、夏にかけて農業用水、水道水等として有効に利用できるようにしていきます。

また現在準備を進めている駒込ダムについても、少しずつではありますが、本体着工・早期完成を目指して鋭意頑張っていきます。写真は駒込ダムサイト直上流部ですが、津軽ダムのように早く試験湛水を開始できるように職員一同頑張っております。



これまで、この紙面を借りてダムをはじめとする治水施設等のインフラストラクチャーの重要性について書いてきたつもりですが、内容の浅い、駄文となった感が否めません。にもかかわらず忍耐強くお付き合い下さいましたことを心より御礼申し上げます。どうも有難う御座いました。新年度からもダム新聞をよろしくお願い致します。(所長 田邊)